

## [1] 新会長挨拶

小林 潔 司

このたび長い伝統を持つ京土会の会長にご推挙頂きました昭和51年卒業の小林でございます。重責ではありますが、一步一步努力してまいり所存でございますので、会員の皆様方のご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。



「土木」という用語は淮南子の「築土構木」という言葉から生まれた、という説があります。築土構木という一節は、「昔、民は湿地に住み、穴蔵に暮らしていたから、冬は霜雪、雨露に耐えられず、夏は暑さや蚊・アブに耐えられなかった。そこで、聖人が出て、民のために土を盛り材木を組んで室屋を作り、棟木を高くし軒を低くして雨風をしのぎ、寒暑を避け得た。かくして人びとは安心して暮らせるようになった」という意味です。多くの土木技術者が引用する件ではありますが、中国の古典から引用したということで満足し、その説明がいまひとつピンとこない。もちろん、このような社会事業の重要性は論を待ちませんが、堯、舜による壮大な治水事業と比較すれば、いささか話が小さい。また、なぜ主流でもない諸子百家の淮南子でなければならないのか、という疑問もあります。もう少し、時代の背景を探る必要があります。

紀元前122年、漢の武帝に淮南王に任ぜられていた劉安が謀反の罪に刺されて自害します。淮南は淮河の南方面の土地、現在は安徽省の北部。淮南王は当代きっての文芸主義者で、王のもとに多くの学士や食客が集まり、淮南は華やかな文化に彩られました。しかし、武帝の帝国主義政策により、中央と辺境ははっきり切断され、辺境の社会文化は見捨てられました。淮南王は武帝の帝国主義に抵抗するため、老荘思想を基軸に辺境の思想を集大成しようとした。これが淮南子です。淮南王は、遠い時代の楚の文化的遺産をたどり、淮南の地の来し方行く末のための歴史文化と知恵の再編集を試みたのです。淮南王は謀反の罪に問われ、志し半ばで悲劇の王になった。けれどもその意図の大半は、いまなお淮南子そのものによって語り継がれることとなります。貧しい辺境淮南の地において、そこに息づ

く人たちのための公共事業の重要性を解く。それが築土構木の思想なのです。まさにシビルエンジニアリングの発想といってもいい。その志は、時代をはるかに下った今日においても、大きな意義を持っているように思います。いま、東京一極集中に対して地方創生の重要性が謳われています。今日ほど、築土構木の思想が必要な時代はないと言った方がいいかもしれません。

グローバル化の中で、アジア各国において英語による土木工学教育の標準化の動きが活発化しております。中国の有名大学も、このような標準化に興味を示しています。しかし、アジア諸国が抱える問題は極めて多様であり、土木学はそれぞれの国が抱える問題に答える実践的学問でないといけません。こういう時代だからこそ、京大土木も築土構木の思想の原点にもどり、グローバル化した社会における土木学の来し方行く末を改めて考えてみる必要がある時期になったと考えております。最後になりますが、京土会のますますの発展と会員の皆様のご健勝を祈念して、私の挨拶とさせていただきます。